

一月十八日 豊栄市も明年度から争くじを發行する、といつても、市町村には發行が許可されない。都道府県が共同で發行している全国自治会くじに二百億円を全額自治会くじに振り分け、四〇〇の収益金の配分を受けようというので、県市長会も参加を決議する。

一月二十日 屎処理施設をアタカ工業の12方式にする。ことに、議員協議会で満場一致で決める。技術革新は日進月歩だ。従来は消化方式、近年は酸化方式になり、今後は12方式になるだろう。施設が小さく経費が安く、水がいらず、臭気はほとんどなく、水は十倍もきれいだ、となるという疑いもつのは当然。従来方式の業者は社運にかかわる重大問題。それに関連して新聞のデマ記事がでたりする。議員の意見もいろいろだったが、関係市町村住民に責任をもつ執行部は、冷静に検討を続けてきた。

一月二十三日 黒崎中学校長本間重蔵先生から「校長の独

### 市長の日記 石才村一

面額以上にすることはあつても要望額を下まわらうにはしないといつてくれる。この調査は、明年度豊栄市内に施行される政府直轄、県、市、一部事務組合、公社、土地改良区全部の事業で、三十三億五千三百万円となる。これは公共事業、すなわち国庫補助のある事業だけで、このほか県と市の単独事業、また金額がはつきりしないもの、たとえば胡桃山排水機、工業用水道、公社の宅地造成などで三十億円以上のものがあるはず。明年度は豊栄市内に、総額八十億円で上という空前の建設工事が行なわれることとなる。

二月二日 明年度の一般会計予算をまとめた。六十億三千万円という大型予算になった。政府予算の編成方針と同様に陳情する。稲葉、佐藤、渡辺の三代表議員も事業要望調査一覽表を渡し協力を要請したが、いずれも政府の要請にこたへない。市会に提出する。市会に提出する。市会に提出する。市会に提出する。

二月七日 大久保の宮尾幸一郎さんの告別式に、渡辺建設政務次官が飛行機でかけつけ、「宮尾さんの要望どおり、大阿賀橋取付道路予算をつけよう」と弔辞を述べた。宮尾さんは町村合併当時の議員で、大阿賀橋建設に執念を燃やして、去る一日には上京して渡辺代議士に陳情した。一昨日新潟市で交通事故にあい即死。八十二歳ながらいつもバイクでこびまわっている元気な人だった。合掌。

### 米國へ農業留学する 秋山剛さん(浦ノ入 十九歳)



「はい、二月末ですが、事前研修等があり、三月上旬には上京いたします」

「留学の動機は」

「私は県立興農館高校の畜産科で三年間学んできました。主に養豚についてです。その結果、やはり、大型経営をしなければこれからの農業は難しいと判断したんです。それに、父が十五年ほど前から豚を飼っている。種豚五十頭、肉豚四百頭、それに、肉牛三十頭ぐらいいおり、私も実際につかまつたら、一層そう思う」

「米國について」

「第一に、常に世界のトップであり、一挙一動は、すぐ影響を及ぼす国である。第二に独立して約二百年、進歩と発展に見せるものがある。第三には、日本と切り離せない政治経済の国である。こんなところから行ってみたい国で、畜産に関しては、気候や面積等は比較できませんが品種については共通していると思います」

「向こうでは、どんな生活か」

「滞在は来年の三月までの一年間です。どんな生活と言われてもちょっと、観光旅行や、民俗と違い、畜産経営を学んでくる訳ですから、決して甘くないと思います。今回は新潟県から五人行くんです。アイオワ州のことですが、行ってみたい。寒いと氷点下三十度になると



### 旧石器時代

とってアール猿人と名づけた。石器を使った形跡はないが、木や草の実を運ぶための器を持ってた袋のようなものを発見した。この見解にリーキー女史は、オーストラロピテクスより古いものとは思えないと反論している。リーキー女史は、夫のイギリスの人類学者ルイス・リーキーと三千年間におたつて灼熱の炎天下で東アフリカを調査し、エチオピアからタンザニヤを経てモザンビークまで全長四千キロにわたる大陸地帯の巨大な歩みというべき大地溝のオールドボーム(そうぞ)に、かめ焼き屋があり、そのものがまきまきかめ一本約一石一斗入るんです。直段ですが、一四五十銭くらいでしたかねえ。用途は、藍汁を入れ、そこへ糸をつるのんで、藍を着色する時の染め方です。一軒に約五十本から八十本ありました」

「最初に藍汁を作るんです。これは酒つくりと同じように実に微妙なんです。阿賀野川付近で取れた藍草を買い入れ、それを藍がめの汁の中へ入れて、そしてそれを手竹で絞ります」

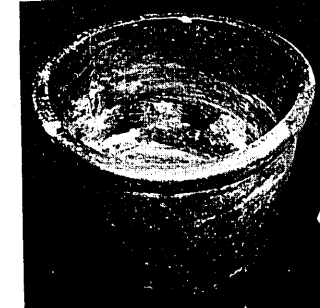
「懐かしいですね。葛塚には約十軒の紺屋がありました。ねえ、高級もんは、藍を四国の徳島や、インドから取り寄せたんです。大正や昭和初期には植物染料を糸に使わず、化学染料になりました。また、藍がめもコンクリートのかめとなり、姿を消しました。在方(田舎)の人がこやし(肥料)入れとして買っていました」

### 藍がめ

「はい、紺屋(染物屋)はなくてはならないものでした。土でこしらえたかめで、ここへは、安田の草水(く



写真は藍がめ(直徑65cm、高さ90cm)と小林八重蔵さん(90歳)



一月二十日の新潟日報に最古の猿人、アフリカで発見、百万年も起源を更新と写真入りで報道されました。その要旨は米國の人類学者クリフランド自然史博物館のドナルド・ジョンソン博士と、カリフォルニア大学のホイット博士が、過去七年前におたつて、エチオピアのアファール地区やタンザニヤで化石人類の発掘を続け、出土した頭蓋骨、アゴなど放射線年代測定法などによって調べ、約三百万年前と明らかにした。それに発見土地の名を

布にするには、先ず糸を染めなければなりません。藍がめの染物屋で欠かすことのできなかった道具に、藍がめがありました。上大口に住む小林八重蔵さん(九十歳)は「藍がめは明治時代まで使った道具でした。……と前置きし

「葛塚紺屋は古くは享保年間(一七二六年頃)に中浦原の割野(現在新潟市)から入ってきた品物といえます。主に野良着、つまり仕事着として着たんです。全盛時は明治の末期で、ボタン織り機を使い、年間二十万反も織ったんですよ。新発田、中条、村上にもちろん、時には奥外へも出しました」

「藍がめとは

「はい、紺屋(染物屋)はなくてはならないものでした。土でこしらえたかめで、ここへは、安田の草水(く